

西真寺通信

令和四年秋号 発行 西真寺

●住職継職奉告、前住職前坊守 七回忌法要の住職あいさつ

本日は、私の住職継職奉告法要ならびに前住職、前坊守の七回忌法要に、お参りを賜りまして、誠にありがとうございます。当山住職として、一言申し上げます。

ご存知のとおり、私は在家の生まれでありまして、幼い頃からお寺に親しんできたという訳ではありません。しかし、実家が門徒であり、母親が熱心な門徒でありました。母は、報恩講を始め、お寺の行事には必ず参加して、お手伝いをしておりましたので、私に様々なご縁や影響を与えてくれました。私が、今ここ「西真寺」にいる縁を語る上で、実の母親が関わって

たことについて少し話をさせて頂きます。

私の母は、6人兄弟の末っ子で、当時四十二歳であった母の母親が、甲状腺の癌で亡くなり、その後、父親が婿さんということもあつたのか、家を出て再婚してしまいました。その為か、私の母は、「見捨てられ不安」を抱えながら生きてきました。

親がいなければ、兄弟を頼ることになります。癌の家系ということもあつてか、お姉さん2人が癌で続けて亡くなり、もなく兄さん2人も癌で亡くなりました。最後に残ったお兄さんは脳の病気で亡くなり、離れて暮らしていた母の父親も亡くなりました。

母親も四十代から、私と祖母

と同じ甲状腺の癌に始まり、腎臓癌、肺がんと転移しましたが、県立癌センターの先生のおかげで癌は根治しました。しかし、その後、うつ病を発症し、脳梗塞となり、最後は脳溢血で亡くなりました。母の人生は喪失感と闘病生活にありました。

母親が、幼少の頃に親を亡くし、同じ境遇であった親鸞聖人と共に念仏に導かれたのは、必然のことであつたのだと思います。まして、人間と異なり、阿弥陀様は「決して見捨てない心」を持つておられる訳ですから、尚の事であります。

しかし、当時の私は、三回の倒産を経験し、結婚して家のローンを抱えながらの生活は不安定で、常に病気を抱えていた母親にとつては、心配の種だつたと思います。

一番仲のよかつた母のすぐ上の兄である私の叔父が、私が僧侶になる際に金銭的な援助をし

てくれました。その母の良き理解者であつた叔父も亡くなり、私の父が脳梗塞になつた頃からの母は、高齢期の喪失感からうつ病になつたのです。

今思えば、幼少期の頃から健全な「自己愛」が育たなかつた母には、根本的な、「見捨てられ不安」がいつも付きまどつていたのでと思います。

この愛着の理論が理解できたのは、大学で哲学の学士と心理学の学士を取得していたからであり、母親を支えたいと思ひ立ち、臨床心理士になるための勉強を始めました。

臨床心理士になるためには、専門の大学院にまず入学しなければなりません。最初に受けた大学院は、国立であつた為に競争率が高く、千人受験して四十人しか合格しない狭き門でした。私は一次の筆記試験で八十人の中に残りながら、二次の面接で落ちました。

次の年は、私立の大学院を受験、一次筆記試験六百人中百人に残りましたが、またもや二次の面接で落ちました。

受験前に臨床心理学科のある

大学院の科目生になり、大学院卒業に必要な実習以外の単位を、全て取得してから臨みました。そのおかげで一次試験には合格しました。しかし、面接で落ちたのは、当時、対人援助（福祉、医療、教育機関）従事者の採用を優先する意向が強く、僧侶はその枠外であったのかもかもしれません。

大学院受験で挫折した一方で私は、ボランティアでホスピスに週一回通っていました。そのホスピスで、坂田先生という泌尿器科の医師に出遭いました。

坂田先生は、五泉にホスピスを立ち上げた、県立癌センターの元医科部長で、母親が癌闘病していた頃からの先生でした。

元々坂田先生は、新潟の西堀の大谷派寺院のご門徒で、その頃七十歳を越えていましたが、ホスピスにおける医師としての限界を感じ、仏教を武蔵野大学で学んでいたのです。

その坂田先生の影響から本願寺派の宗門校である武蔵野大学大学院で終末期ケアを学ぶ決心をし、今日の講師である田中先生に出遭えた訳です。

そして、田中先生のご教授の下、修士論文では、母が抱えていた「自己愛」の課題について、親鸞聖人と明恵上人を比較して研究をし、先生から「S」の評価を頂き、大学の紀要（研究論文集）にも載せて頂きました。

その間に、母は亡くなりましたが、私に様々なご縁を残してくれました。

本日出勤して頂いた本願寺派の新潟組組長のお母様は、私の

母の友人でありました。組長に入寺の際、承認を頂きに伺った折、組長のお母様から、「たとえ苗字が変わっても住職になったことを亡くなったお母さんはお浄土できつとよろこんでおられる」と言っておられました。この言葉を聞いた時、心配をかけた亡き母から許してもらった気がしたので。西真寺に入寺して本当に良かったと思うご縁でありました。

因みに、私が二十年務めていた新潟のお寺の布教使が、この西真寺の報恩講などで法話して下さっていた高橋先生であり、西真寺を紹介してくれたのが、善龍寺様の住職です。

また、三十五年前、勤めていた西武百貨店の会社の先輩に本間さんという方がおられ、村上出身で、同じ新潟県出身という事で仲良くさせて頂きました。

その本間さんのお兄さんは、倉崎総代の同級生なのですが、

元高校の先生で、村上高校と、桜ヶ丘、女子高時代に、前住職と同じ職場であり、毎週金曜日に西真寺のマージャン部屋でマージャンをしていたそうです。その本間さんとは、今年三十五年ぶりに村上で会うことが出来ました。

親鸞聖人は、法然上人が流罪にならなかつたら私もまた流罪の地に赴くことがなかつた。そして、私が流罪の地に赴くことがなかつたならば、人々を教導くことが出来たであろうか。これもまた師である法然上人のご恩によるところであると申されました。

私が、もし三度の倒産に遇わなければ、僧侶にはならなかつたと思います。また二度に渡り大学院受験に失敗しなければ、田中先生に遇えなかつたでしょう。また、先生が本願寺派の僧侶であることから、私が大谷派から本願寺派転派することもなかつたのです。

また坊守と結婚しなければ、此処、村上にはいなかったでしょう。

門徒総代あいさつ
責任役員 塚田 進

因縁の「因」は、直接の原因ではありません。「縁」は間接的な条件です。因と縁が様々に関連して起こることが縁起です。

私にとつての「因」である業識ごうしき一言申し上げます。

は実母であります。坊守との結婚による「縁」のめぐり合わせによつて広がった訳です。そして、今ここに在る全ての皆様、御寺院が入寺して二か月後にお亡くなり、先生、総代をはじめとするごりましました。当時の現住職は、五門徒の皆さん方と縁をつないで、泉市に住みながら、新潟の御寺ださったのは、この七回忌に継職院に勤め、西真寺の法事と葬儀奉告させて頂いた前任職であり、がある場合に村上に来ておられました。

最後に、西真寺のご門徒さんに巡り会わせて頂いた前任職と前坊守の恩に感謝を申し上げます。西真寺住職継職法要ならびに西真寺前任職、前坊守の七回忌法要における私からのあいさつとさせて頂きます。本日は、誠に有難うございました。合掌

は、量り知れないものがありました。入院し治療の結果全快いたしました。また、念願の駐車場用地の購入と整備、京都本山から戻り次第、前坊守の合

そして、前任職の密葬が終わり、前坊守は体調不良の為、施設から村上病院に転院して頂き、一抹の不安を抱えながら、現住職は転派の研修の為、京都本山へと向かいました。

その一週間後、習礼中、前坊守がお亡くなりになりました。現住職が本山で習礼中は、急用以外は連絡を取ることが出来ませんでした。

そこで現坊守と法中寺院である本悟寺様、葬儀を施行する会津屋さんと話し合いを行い、現住職が京都本山から戻り次第、前坊守の通夜、そして前任職と前坊守の合同本葬儀を決断致しました。

この様な過程を経て、現住職とご家族全員が、村上に移住して五年が経過しました。この間、私も現住職も病院で癌と診断され互い

その間、前任職が亡くなり、現住職に連絡を入れた時の動揺

現住職は、現在会津屋さんに勤めながら、西真寺護持伝承の為、家族の生活の為に、身を粉にして仕事と法務を勤め、人の苦しみと向き合いながら仏法の心を私たちに伝えております。

私たち門徒も、生活の中で、住職と共に生活における苦しみとの根本である（生死）の課題と向き合う姿勢が重要であり、正信偈にあります「証知生死即涅槃」（しやうちしょうじそくねはん）すなわち、迷いのまま救いがあるから

に他なりません。

西真寺の門徒として、西真寺の節目となるこの「住職継職法要、ならびに前住職、前坊守の七回忌法要」に関わり、門信徒の御協力を賜りながら行うことができたことは、大変意義深いことでもあります。

最後に、先人のご尽力によって護られてきた西真寺をこれからも、皆様のご協力のもと、西真寺の発展のために尽力して参ります。この度の法要にご参拝頂き、誠に有難うございます。総代を代表して、皆様に厚く御礼を申し上げ、祝辞のご挨拶とさせていただきます。



住職継職奉告法要ならびに
前住職前坊守七回忌法要
懇志志納者（順不同敬称略）

川原 正一	羽黒町	平山 英明	二之町
関 三好	羽黒町	清水 保子	二之町
相馬 春男	羽黒町	本間 俊成	新町
勝山 逸雄	長井町	中村 直人	新町
平山 保男	小町	花井 正宏	堀片
平山 美以子	庄内町	平山 守	杉原
峯田 光秋	久保多町	杉浦 智美	仲間町
小竹 開三郎	久保多町	手塚 豊明	坪根
中山 久一	久保多町	福田 貞子	猿沢
阿部 ヨリ子	久保多町	福田 修	猿沢
佐藤 義則	久保多町	福田 隆史	猿沢
五十嵐 賢之助	塩町	中村 秋生	胎内市
藤田 耕作	安良町	小山 昭子	新発田市
平山 恵子	大欠	小池 京子	新潟市
野本 保子	大欠	水倉 征一	新潟市
伊藤 利雄	大欠	小竹 聡	新潟市
倉崎 勝郎	大欠	小竹 麗子	東京都
塚田 進	瀬浪浜町	谷屋 タカ	東京都
菊地 テツ	瀬浪松波町	細野 秀子	川崎市
美濃 洋子	久保多町	高山 豊明	千葉県
野田 耕造	肴町	川原 行男	二之町
武田 鉄三	山居町	平山 次夫	坂出市
伊部 厚子	山居町	船山 由喜男	松原町
小池 常喜	山居町	船山 博貴	松原町
齊藤 香	飯野桜ヶ丘		



五十嵐 美和子 新潟市
 瀧波 匡子 小国町
 石黒 稔 久保多町
 浅野 良三 堀片
 村上門徒会五名
 計六十一名様（出席者含む）

この度の法要にご賛同頂き、また丁重なるご懇志を賜り、誠に有難うございました。合掌